

# トリック劇場版 2

2006(平成18)年5月15日鑑賞(東宝試写室)



監督＝堤幸彦／出演＝仲間由紀恵／阿部寛／片平なぎさ／堀北真希／平岡祐太／生瀬勝久／野際陽子／綿引勝彦（東宝配給／2006年日本映画／111分）

……初主演の仲間由紀恵を一躍有名にしたのが連続テレビドラマの『トリック』だが、彼女は今や超売れっ子に……。コミカルな阿部寛とのコンビの冴えと、「売れっ子奇術師」のトリック見破り能力はお見事なものだが、所詮テレビドラマの延長……。まあ、あまり固いことを言わずに楽しめばいいのだろうが……。

## 「シリーズ」の2枚看板は……？

私はそれまで全然知らなかったが、テレビの連続人気ドラマ『トリック』の2枚看板は、自称・超実力派売れっ子奇術師の山田奈緒子（仲間由紀恵）と日本科学技術大学教授の上田次郎（阿部寛）。奈緒子は「どんなに不思議な現象もすべて奇術で再現できる」という父親から受け継いだ持論と、生来の負けず嫌いな性格から、毎回トリックを見破る実践派で、ホントの主人公。これに対して、上田は若手物理学者として学会でも一目置かれる存在だが、学者特有の頭の固さから単純なトリックにもすぐに騙されてしまうという、どちらかというダメ理論派で、ホントは奈緒子の引き立て役……？

シリーズものが続くためには、登場人物のキャラが命。当然、今回の劇場版でもこの2人のキャラは際立つはず……。

## ナゾの女性はホントの霊能力者……？

映画の冒頭に登場するのは、「2時間ドラマの女王」片平なぎさ。今回彼女が扮するのは、いつも白い洋服、白い帽子で正装している霊能力者、はこがみ筐神佐和子。

佐和子が絶海の孤島・筐神島で示した、手を触れずに巨岩を山頂へ押し上げるという奇蹟に度肝を抜かれた島民たちは、当初オウムまがいのインチキ集団が島に上陸してくることを拒否していたにもかかわらず、今ではその信者に……。

彼女の姓が示すとおり、佐和子が見せる多くの奇蹟（トリック）は四角い箱を使ったもの。引田天功の「脱出芸」は世界的に有名だが、手品には何らかのトリックがあるはず。しかし、手を触れずに巨岩を山頂へ押し上げたのは、やはり奇蹟……？ そして、彼女はホントの霊能力者……？

## 若者2人に注目！

この映画には、①書道教室を開いている奈緒子の母親の山田里見（野際陽子）、②富毛村の村長の赤松丑寅（綿引勝彦）、③佐和子の側近で信者たちをまとめるリーダーの佐伯周平（上田耕一）、さらに奈緒子のことを「なんや、コイツ」と思っているつまらない役柄の警視庁刑事の矢部謙三（生瀬勝久）や秋葉原人（池田鉄洋）が登場するが、こんなおじさん、おばさんはこの際無視して、2人の若者に注目。

1人は、富毛村の青年で、子供の時にかくれんぼ遊びをしていたところ、突然行方不明になってしまった西田美沙子（堀北真希）を霊能力によって探してもらうために、佐和子を訪ねてくる青沼和彦（平岡祐太）。もう1人は、富毛村から連れ去られ、今は筐神島に軟禁されている美沙子。平岡祐太は『チェケラッチョ!!』（06年）での演技が注目された若手。そして堀北真希は、第29回日本アカデミー賞で12部門を受賞した『ALWAYS 三丁目の夕日』（05年）で、東北地方からの集団就職の少女役でイキのいい演技を見せて、注目された美少女。

仲間由紀恵は『トリック』が出世作であり、ライフワークだから（？）いいものの、堀北真希はこんなギャグ映画で「便利屋」的に使ってほしくないというのが、私の正直な気持だが……。

## 奈緒子の眼力はさすが……

さすが『トリック』に長年主役として登場しているだけに（？）、仲間由紀恵扮する奈緒子のトリックを見破る眼力はさすが……？ 何よりも、きっと何か仕

掛けがあるに違いないという信念を持ち、とことん考え抜くその姿勢が今ドキの若者には珍しくすばらしい……？ やはり、こういう領域では、自由な発想ができることが大切だが、それ以上に執念が大切……？

島の頂上に巨岩をどのようにして持ち上げたのかを解明するについて重要なヒントになったのは、海と反対側の谷底に大量の割れた小石とボロボ布が放置されていたこと。これで「ハハア、なるほど」とそのトリックを見破ることができれば、あなたも奈緒子並みの能力が……。

また、島から脱出するためにはゴムボートが必要だが、上田と奈緒子が乗ってきたゴムボートは、今は重りの岩とともに海の底に……。そこで、このゴムボートを岩とともに海底から引き上げるための方策は……？ これは、巨岩を山頂に引き上げたのと全く同じ理屈だよ……。

## つまらんギャグはやめてほしいが……？

私は、テレビの人気番組を劇場版にすること自体には特に反対ではないが、「アホバカバラエティー番組」が大嫌いなのは、そこで蔓延しているつまらんギャグの応酬。昔の「コマネチ！」や「もみじまんじゅう！」など漫才師の工夫したギャグは、客を笑わせる「芸」のネタとして重要なもの。しかし、「電波の公共性」を標榜しながら、安易な「アホバカバラエティー番組」ばかり電波に流し、そこに二流、三流芸人を集合させて口々につまらんギャグを応酬させるのはやめてほしいと私は常々思っている。したがって、そんなつまらんギャグをスクリーン上に持ち込むことはやめてほしいもの。

今回、ナゾの霊能力者、筐神佐和子に従う多くの信者たちの合言葉は、ケツタイなポーズを伴った「よろしくね。」というもの。この映画を監督した堤幸彦は、『トリック』シリーズを通して演出を手がけているとのこと。そしてパンフレットには、「脱線に次ぐ脱線を繰り返す脱力ギャグの応酬で唯一無二の“トリックワールド”を構築」と書いてあるが、私にはこの手のつまらんギャグは願い下げ……。もっとも、そう言ってしまうと、この『トリック』の基本的コンセプト自体が成り立たなくなるのかも……？

2006(平成18)年5月18日記